

2013年度事業報告

1. 会員動静 (2014年3月2日現在)

	新入会員	退 会	除 名	逝 去	現在数
名誉会員	4			5	32
正会員	116	89	17	14	2,909
(うち学生会費納入者)	(77)	(29)	(8)	(0)	(425)
賛助会員	0	0	0	0	11
計	120	89	17	19	2,952

2. 逝去会員

名誉会員

西 沢 利 栄 2013年2月4日

西 村 嘉 助 2013年6月1日

服 部 銈二郎 2013年6月9日

小 池 一 之 2013年8月23日

藤 原 健 藏 2013年9月6日

正会員

吉 田 義 行 2009年11月16日

田 中 正 央 2012年9月16日

原 田 肇 2012年11月22日

西 木 敏 夫 2013年1月30日

渡 邊 一 夫 2013年2月11日

高 橋 伸 夫 2013年7月13日

奈 良 芳 信 2013年7月22日

福 本 紘 2013年7月31日

杉 浦 文 子 2013年8月9日

新 宅 暢 久 2013年9月29日

高 橋 誠 一 2014年2月11日

小 林 秀 礼

杉 木 茂

山 口 不二雄

3. 出版刊行物

地理学評論	6冊 (86巻3号～87巻2号) 482ページ
Geographical Review of Japan Series B	1冊 (85巻2号・86巻1号～2号・電子ジャーナル) 237ページ
E-journal GEO	3冊 (8巻1号～2号・電子ジャーナル) 282ページ
学術大会発表要旨集	2冊 (84号～85号) 511ページ

4. 集 会

集 会 名	開催年月日	参 加 者
(1)秋季学術大会(福島大学)	2013年9月28日～9月30日	416名
一般(口頭)発表(77)、ポスター発表(28)、シンポジウム(5件・36)	9月28日～9月29日	
第24回地理教育公開講座	9月28日	
研究グループ集会(17件)	9月29日	
懇親会(生協食堂)	9月28日	160名
巡検3件	9月30日	
(2)春季学術大会(国土舘大学)	2014年3月27日～3月30日	
一般(口頭)発表(222)、ポスター発表(76)、シンポジウム(8件・53)	3月27日～3月28日	
第25回地理教育公開講座	3月27日	
研究グループ集会(21件)	3月28日	
懇親会(学生食堂)	3月27日	
巡検2件	3月29日～3月30日	

5. 総会等

(1)総 会	(第1回)2013年6月22日 (臨時)2014年3月26日	出席者15名	委任状78名	合計93名
(2)代議員会	(第1回)2013年9月28日 (第2回)2014年3月26日	出席者50名	委任状48名	合計98名
(3)理事会	5回・常任理事会 12回			

6. 専門委員会報告

(1) 総務専門委員会

公益社団法人としての学会の通常の運営を円滑に進めるために、記録の整理保管、会員関連事務（総会・代議員会関連、理事会関連、会員の入退会など）および対外的事務（後援・協賛依頼、転載許可、その他依頼に対する対応など）、事業計画案の作成、学会事務局の環境整備に関する業務などを行った。

また、日本地理学会賞、出版助成、小林浩二研究助成、さらにロナルド E. アブラー氏（ペンシルバニア州立大学名誉教授）の名誉会員推薦に関する業務などを行った。

(2) 財務専門委員会

- 1) 会費の徴収および予算執行に関わる通常会務を行った。
- 2) 2013 年度決算書（概算）案、および 2014 年度の収支予算案を作成した。
- 3) 長期的な会費収入の見通しをたてるため、科学的な人口推計手法に基づく会員数の長期推計を行った。

(3) 地理学評論編集専門委員会

地理学評論第 86 巻第 3 号～第 87 巻第 2 号を編集、発行した。掲載された論文数は、論説 10 編、総説 1 編、短報 7 編である。掲載論文数は引き続き減少傾向をたどり、昨年度の 62%にとどまった。このうち 10 編が人文系統、8 編が自然系統であり、近年の中では、自然系統の掲載論文の割合が高かった。このほかに書評 21 編、紙碑 3 編、フォーラム 2 編、学会記事等を掲載した。本年度の委員会において掲載に至った論文数は 19 編であり、昨年度より 3 編減少した。受理論文のうち、自然系統の割合は約 37%であり、自然系統の割合が昨年度より上がった。新規投稿数は昨年度を若干上回り 40 本であった。新規投稿論文では、自然系統論文の割合は 23%にとどまった。本年度の掲載論文・受理論文では、自然系統の割合が昨年度より上がったが、新規投稿論文では人文系統の数が再び増加している。

掲載論文数の減少は、主に、新規投稿論文数の減少によるものである。このことは、地理学評論の刊行を維持する上で非常に大きな問題である。新規投稿数を増やすためには、審査の迅速化をはかる必要があると考え、新しい投稿・編集体制を検討してきた。理事会・代議員会における議論を踏まえ、2014 年 4 月より新システムの稼働を始めることとなった。

(4) Geographical Review of Japan Series B 編集専門委員会

Geographical Review of Japan Series B（地理学評論英文誌）は、電子ジャーナルとして 2013 年 5 月に Vol. 85, No. 2 を発行し、短報 3 編と書評 2 編を掲載した。また、2013 年 7 月に発行した IGU 京都国際地理学会議特集号(Vol.86, No.1)には総説 11 編を掲載し、電子ジャーナルとして Web 上で公開するとともに、IGU 京都国際地理学会議でも電子媒体に収めて参加者全員に配布した。

(5) E-journal GEO 編集専門委員会

オンライン学術誌 E-journal GEO では、第 7 巻 2 号から受理後の原稿の組版、画像処理、J-STAGE 搭載に関する作業を外部の業者に委託するとともに、2012 年 11 月に投稿規定・執筆要領の改訂を行い、年 2 回のアップロードではなく、受理された原稿については、順次公表していくことにした。

今期の編集専門委員会が編集・発行した第 8 巻は、2013 年 4 月 19 日、9 月 13 日、11 月 1 日にアップロードされ、解説記事 7 編、調査報告 6 編、地理教育総説記事 1 編、シンポジウム記事 8 編を掲載した。また、2014 年 3 月には解説記事 1 編、シンポジウム記事 4 編がアップロードされる予定である。投稿数、掲載数ともに増加傾向にあるなかで、編集体制を強化するとともに、社会的な認知度の向上を図っていく必要がある。

(6) 集会専門委員会

2013 年秋季学術大会（福島大学、一般発表 77、ポスター発表 28、シンポジウム 36、巡検 3）ならびに 2014 年春季学術大会（国士舘大学、一般発表 222、ポスター発表 76、シンポジウム 53、巡検 2）のプログラム編成および要旨集編集の業務および大会推進業務を行った。

(7) 広報専門委員会

学会ホームページの更新を月数回のペースで随時行った。また、ツイッターとフェイスブックによる情報発信を継続的に行った。ツイッターでは学会からの情報提供と、他者が発信した地理学に関する記事の転送を行っているが、約四千人の人達（フォロワー）に閲覧されており、大きな反響を得ている。フェイスブックはツイッターの情報の一部を転送する

メディアとして機能している。

地理学の長期的な発展のために、高校生が日本地理学会の活動に参加する可能性を検討し、2014年の春季学術大会で高校生によるポスターセッションを試行することになった。ホームページ、ツイッター、メーリングリスト等で呼びかけを行ったところ、予想を上回る数の応募があり、16件の発表が行われることになった。

地理情報システムに関する商業誌 GIS NEXT に、日本地理学会のページを確保していただき、会員による研究や GIS の動向に関する記事を寄稿した。

(8) 交流専門委員会

- 1) 国内外の関係諸団体および個人からの後援・協賛などの依頼・問合せに対応した。
- 2) 2013年8月開催のIGU 京都国際地理学会議における展示ブースに協力した。学会紹介パンフレット、DVD、ポスターを作成展示し、学会研究グループ紹介 DVD を作成配布した。
- 3) 日本学術会議および加盟している連合組織（地理学連携機構・地理関連学会連合・日本地球惑星科学連合・自然史学会連合など）との連絡・交渉を行った。
- 4) 日本地球惑星科学連合の地球人間圏科学分野でのサイエンス・ボード、環境・災害対応委員会などにおける活動に取り組んだ。
- 5) 日本地球惑星科学連合の2014年大会に参加する準備作業を行い、「人間環境と災害リスク」を一般セッションの提案母体となって関連学会と共催して提案したほか、「地球環境変化の人間の側面研究計画 IHDP (国際セッション)」、「Global Land Project (国際セッション)」、「都市における極端気象 (ユニオンセッション)」、「津波堆積物 (一般セッション)」を関連学会等と共催して提案した。
- 6) 2013年7月31日(金)～8月4日(月)に日本・福岡(九州大学)にて開催された第8回日中韓地理学会議を共催した。また、2014年7月30日(火)～8月4日(日)に韓国・プサン市で開催される第9回韓中日地理学会議を共催することとした。

(9) 企画専門委員会

- 1) 昨年度に引き続き本年度も4回の委員会を開催し、「国際化の推進」をスローガンに活動を行った。
- 2) 当学会は、「G 空間 EXPO2013」(2013年11月16日(土))に参加したが、企画専門委員会は「地理の魅力再発見！—未来を創る地理教育—」のシンポジウムの企画を担当し、準備に取り組んだ。シンポジウムは120名の参加者があり、盛況だった。
- 3) 今日、欧米では、国際共同研究、大学院プログラム、人事・学生交流、ジャーナルの編集、書籍の出版をはじめさまざまな面において、国際化が進行している。この状況を踏まえ、当委員会では、啓発活動の一環として「日本地理学の国際化」という題でシンポジウムを企画した。このシンポジウムは、国士舘大学で開催される春季学術大会(3月28日(金)9時30分～12時)において実施される。
- 4) 「英文叢書出版事業」に関し、ホームページを更新するなど、応募の促進に努めた。

(10) 地理教育専門委員会

地理教育専門委員会は、ほぼ毎月1回定例で開催している。本年度の活動は以下の通りである。

- 1) 学術会議の提言となる高等学校必修「地理基礎」にもとづいて、研究開発校(日本橋女学館高等学校・神戸大学附属中等教育学校)を支援した。
- 2) 国際地理オリンピックを支援した。本年度は、第10回国際地理オリンピック(7月30日～8月5日)を京都で開催し、32カ国126名の選手が参加した。日本選手は銀メダル1名、銅メダル1名と健闘した。
- 3) 一般向けの地理教育公開講座(春季学術大会、秋季学術大会)を支援し、広く地理学・地理教育の普及に努めた。
- 4) 日本の地理教育に関する英文叢書の出版に向けて編集作業を進め、『Geography Education in Japan』を Springer 社から出版予定である。
- 5) 茨城県大子町の教員対象研修会の講師として委員を派遣した。
- 6) 全国の主な大学・高等学校の学生・生徒を対象とした地理認識調査を実施し、その結果をマスコミ等に公表することにより、高等学校における地理履修の必要性を広く訴える予定である。
- 7) 大学入試における地理受験に関わる情報を収集し、地理を受験科目として設置していない主要私立大学に対して受験科目として地理を採用するように働きかける予定である。

(11)資格専門委員会

資格専門委員会は、日本地理学会の認定する資格である GIS 学術士と地域調査士の運営と企画を行っている。2013 年度中に資格専門委員会は 11 回、管轄する地域調査士認定委員会は 4 回、同じく GIS 学術士資格委員会は 3 回開催した。

地域調査士制度に関連し、地域調査士講習会は 2013 年 4 月（法政大学市ヶ谷キャンパス）、6 月（日本地図センタービル内（専門地域調査士講習のみ））、10 月（立正大学大崎キャンパス）、11 月（京都教育大学）と、計 4 回開催した。受講者数について、地域調査士講習会 175 名、専門地域調査士講習 14 名であった。2014 年 2 月 28 日現在、地域調査士は 39 名、専門地域調査士は 14 名が認定された。学部科目については 18 大学・20 学科（コース）、大学院科目については 3 大学院の開設科目が認定されている。

GIS 学術士制度について、2014 年 2 月 28 日現在の GIS 学術士実績証明団体数は 30、GIS 専門学術士実績証明団体は 14 である。また、2013 年度に GIS 学術士と認定された者は 28 名、GIS 専門学術士と認定された者 2 名。GIS 学術士（見込み）と認定された者は 50 名であった。

2013 年度、GIS 学術士資格関連規程の改正（2014 年 4 月 1 日施行）、そして地域調査士制度の検証を主眼としたシンポジウムを開催（2014 年 3 月）し、当委員会の事業の見直しと将来展望を積極的に行った。

7. 各種委員会報告

(1)名誉会員候補者推薦委員会

委員長：中田 高

委員：菅野峰明、高橋眞一、滝沢由美子、田宮兵衛

本委員会は日本地理学会の規約に則り、委員間で慎重に検討・審議した結果、対象となる全会員の中から、下記 2 会員を付記した理由により、名誉会員候補者として推薦することを決定致しました。

名誉会員候補者：式 正英会員

推薦理由：式 正英会員は、建設省地理調査所（現国土地理院）および経済審議庁（現経済企画庁）を経て、お茶の水女子大学および東京農業大学において 37 年の長きにわたって自然地理学とくに地形学の教育と研究に携わった。この間、7 編以上の著書、および「地理学評論」掲載論文 2 編、「建築雑誌」、「人類科学」、「地学雑誌」、「第四紀研究」等の掲載論文約 30 編や調査研究報告を含め多くの論文を発表し、地理学の研究を推進してきた。

同会員は、代表的な著書『日本の氷期の諸問題』（古今書院、1975 年刊）が示すように、早くから日本アルプスの氷河地形を研究テーマとし、この分野の戦後における嚆矢となる貴重な研究成果を残した。さらに、政府職員の時代には、1951 年に制定された法律「国土調査法」による地形調査作業規程の原案を作成し、地形分類図作成を主導した。その成果としての 5 万分の 1 地形分類図「国土調査、地形分類図」および都市地盤調査に関連した微地形分類図など、多様な分類図を刊行し、その発展に大きく寄与した。また、同会員が作成した「多摩川流域斜面形分類図」（『森林保全に関する多摩川水系調査報告書』1953 年）では斜面形による分類を初めて提起し、その結果は、林野土壌調査の基礎となるものであり、高く評価される。

さらに特筆すべきは、地形学と地形分類を地図学において総合したことである。その成果は、国土の有効な科学的利用において幅広く利用され、応用地理学分野での学問の有効性を社会に示すこととなり、地理学の発展に多大な貢献を行った。

日本地理学会では庶務委員を 2 期務めたほか、建設省計画局の全国都市地盤調査協議会専門委員、総理府国土総合開発審議会専門委員、農林省草地試験場流動研究員、上越新幹線環境調査委員会委員、国立極地研究所南極地名委員会委員を務めるなど、地理学の専門性を活かし社会に貢献した。

以上の功績により、式 正英会員を本会の名誉会員候補者として推薦する。

名誉会員候補者：水越允治会員

推薦理由：水越允治会員は、1960 年から 1995 年まで、三重大学学芸学部・教育学部・人文学部、同大学院人文社会科学部研究科に在籍し、自然地理学とりわけ気候学の教育と研究に携わるとともに、いくつかの大学・大学院において非常勤講師を務め、三重大学退官後は皇學館大学社会福祉学部で勤務するなど、長きにわたって地理学の教育と研究に専念した。

同会員の気候学的研究は、降水、気温変動、風、湿度等に及ぶが、なかでも大雨に関するさまざまな側面を追及した研究がメインテーマであり、地域的には中部日本を対象としたものが多く、その成果は地理学評論 5 編をはじめ多くの学会誌などに論文や報告書として発表されている。この他、専門的知見を活かした啓蒙的共著書をいくつか刊行し、自然地理学とりわけ気候学研究の普及・発展に多大な貢献をした。1980 年代より古気候学研究に主要活動の場を移し、天候等に関

する古記録から過去の気候を復元することに取り組み、多くの成果を挙げ日本の気候学研究において独自の地位を構築した。

今回、名誉会員候補者として同会員を推薦するにあたり特筆すべきは、2004年『古記録による16世紀の天候記録』以降、東京堂出版から継続的に刊行された日本の古気候資料の編纂を行ったことである。『古記録による16世紀の天候記録』では、古文書などに残された京都・奈良を中心とした天候記録として日別に天気記事を収集し、1501年1月1日から1600年12月31日までの100年間の日付に従って整理した。天気記事以外にも、季節に関連することがら、生物季節、生活季節、また大気圏以外の自然現象なども、言及している。その後も、2006年『15世紀』、2008年『14世紀』、2010年『13世紀』、2012年『12世紀』と刊行は継続し、これまで5巻の合計2,800ページに達する労作を刊行した。これらの編集が遂行可能となったのは、同会員の気候学的諸研究から得た深い知識と経験がもととなっており、これらの資料は今後の気候問題および日本の自然環境影響の歴史的变化の研究に必須の資料になるものであり、学界の発展に大きく寄与したことは、高く評価される。

以上の功績により、水越允治会員を本会の名誉会員候補者として推薦する。

(2) 日本地理学会賞受賞候補者選考委員会

委員長：岡橋秀典

副委員長：内田忠賢（小委員会A）、高橋日出男（小委員会B）、岡橋秀典（小委員会C）

委員：小委員会A（優秀論文部門、若手奨励部門、論文発信部門）：浅野敏久、内田忠賢、小野寺 淳、川久保篤志、高岡貞夫、西原 純、山縣耕太郎

小委員会B（優秀著作部門、著作発信部門）：小泉武栄、高橋日出男、高柳長直、辻村真貴、中村周作、尾藤章雄、藤田裕嗣

小委員会C（地理教育部門、学術貢献部門、社会貢献部門）：岡橋秀典、鈴木康弘、鈴木裕一、高木彰彦、松本 淳、山崎孝史、山下宗利

選考委員会の答申を受け、理事会決定した受賞者名・選考理由を下記に掲載する。

優秀論文部門受賞候補者：原口 剛会員

「地名をめぐる場所の政治—1970年代と2000年代の「釜ヶ崎」を事例として—」『地理学評論』第85巻第5号

本論文は、1990年代以降、議論が深まってきた「場所」の定義・概念化をめぐり、「地名」および、それが構築された社会的背景を手がかりに、いわゆる「釜ヶ崎」をフィールドに検証した作品である。研究史を十分整理した上で、著者による長年の現地調査を基に、「場所」を構成する「労働者」「労働運動」「地域住民」「地域事業者」など多様な主体による集団的アイデンティティの対立や葛藤を、的確な資料分析を通して、「場所」とその動的な存在過程を具体的に示すことに成功した。このような検証こそが今後、さらなる理論的な深化に寄与し、また、地理学の社会的意義を提示するだろう。さらには、新鮮な視点から、地域の現代史を描いた作品としても、学術的価値は高い。

若手奨励部門受賞候補者：杉江あい会員

「バングラデシュ農村部における「物乞い」の慣行と行動」『地理学評論』第86巻第2号

本論文は、バングラデシュ農村部における「物乞い」の施しと慣行について、精力的かつ詳細なフィールドワークに基づき、実証的に論じた作品である。従来、調査が難しく、論じられることが少なかった第三世界の「物乞い」について、障害の有無や、集落以外の場における慣行のあり方などを検討し、モビリティの重要性を指摘するなど、地理学的な視点から検討を行っている。また、今後の世界地誌の記述に資する膨大な一次資料を収集、提供した点でも高く評価されよう。なお、本論文は、著者の卒業論文を加筆修正した作品であることも特筆される。

論文発信部門受賞候補者：岩間信之・佐々木 緑・田中耕市・駒木伸比古会員

「東日本大震災被災地における食料品小売業の復興プロセスと仮設住宅居住者の生活環境問題」E-journal GEO、第7巻第2号

本論文は、少子高齢化が進行する地域で、広く問題となっているフードデザート研究成果を応用し、岩手県の被災地域において、震災発生以降の食料品流通の復興プロセスを明らかにするとともに、仮設住宅入居後の買い物環境の変化を分析した作品である。その成果は、被災地の今後の生活環境の改善に寄与することが、大いに期待できる。また、本研究は、東日本大震災をめぐる諸分野による現地調査において、地理学からの重要な研究発信の成果として、社会的な貢献が非常に高いものと評価される。

優秀著作部門受賞候補者：平岡昭利会員

平岡昭利会員による著書『アホウドリと「帝国」日本の拡大 南洋の島々への進出から侵略へ』（明石書店、2012年）は、日本における離島研究の第一人者である著者がライフワークとしてきた、南洋島嶼部への日本人の進出に関する研究を集大成したものである。本書では、長年にわたるフィールドワークと丹念に収集された資料に依拠する緻密な論理の組み立てによって、明治期から大正期における日本人の太平洋進出、そして日本国家の領域拡大の過程が鮮やかに実証されている。地理的事象における因果関係の前提として、人間あるいは組織の行為目的や動機に一貫して注目している本書は、広範な視野および卓抜した地理学的思考とあいまって、新たな観点から近代日本の拡大を論じた類例のない歴史地理学、政治地理学の研究書として結実しており、地理学研究の範となる成果と言える。以上により、日本地理学会賞（優秀著作部門）にふさわしいものと判断し、候補者として推薦する。

著作発信部門受賞候補者：小野有五会員

小野有五会員による著書『たたかう 地理学 Active Geography』（古今書院、2013年）では、長年に及ぶ環境保護、災害被害者支援、アイヌ民族差別撤廃などに対する著者自身の具体的な思考や行動が詳細にドキュメントされ、自然地理学の代表的研究者である著者と社会との関わり方が実に生々しく描出されている。今日、社会における地理学の意義が問われるなかで、地理学が社会や環境を良くするために行動し「たたかう」有様を社会に向けて提示しつつ、地理学の変革の必要性を説得力高く訴え、社会と向き合い「たたかう」勇気を地理学研究者に与えている。地理学研究者が地理学を使って現実社会の問題や矛盾を解決するための手引き書とも言え、これまでに類書のないきわめて画期的かつインパクトの大きい著書として高く評価できる。以上により、日本地理学会賞（著作発信部門）にふさわしいものと判断し、候補者として推薦する。

地理教育部門受賞候補者：吉水裕也会員

吉水裕也会員の専門領域は地理教育であり、特に授業構成理論の視点から、社会科地理における学習問題発見の内容と方法に関して精力的に研究を進めている。氏の研究の特徴は、中学校・高等学校での勤務経験を活かし、教育現場における授業実践に基づいた授業理論の構築を目指しているところにある。吉水氏は、地理教育における交流・普及活動に対しても活発に活動している。多くの社会科教育・地理教育関係学会で活躍しており、特に人文地理学会地理教育部会では、長年世話役を務め、部会運営に貢献した。また、現場の教師とのネットワークも大事にし、教育研究会での講演や指導助言を重ねている。さらに、国際的な地理教育活動にも積極的に取り組み、2013年夏に京都で開催された「第10回国際地理オリンピック」では、日本側の実行委員会副委員長として大きな役割を果たし大会を成功に導いた。このように地理教育研究および地理教育における普及活動に対する貢献はきわめて大きいものがある。以上により、吉水裕也会員を日本地理学会賞（地理教育部門）にふさわしいものと判断し、候補者として推薦する。

学術貢献部門受賞候補者：太田陽子会員

太田陽子会員は変動地形学の研究・教育に多大な成果をあげ、日本における地理学の普及・啓発に寄与するとともに、国際的にもきわめて高い水準の学術的貢献をなし、日本の地理学の水準の高さを世界に示した。1995年には国際第四紀学連合の副会長に推挙され、この要職を務めあげるとともに、国際誌において日本の変動地形学の研究水準を常に世界に発信し続けた。近年は国立台湾大学において、活断層や津波堆積物の研究者育成に尽力し、台湾における変動地形学の礎を築くことにも貢献している。太田氏の国際的な研究活動は、ニュージーランド、パプアニューギニア、南北アメリカ大陸太平洋岸等にも及び、それらの成果は『変動地形を探るⅡ』（古今書院、1999年）にまとめられ、変動地形学を学ぶ後進にとって貴重な指針となっていることも特筆に価する。以上により、太田陽子氏を日本地理学会賞（学術貢献部門）にふさわしいものと判断し、候補者として推薦する。

(3) 災害対応委員会

委員長：熊木洋太

委員：青木賢人、青木朋子、宇根 寛(幹事)、海津正倫、岡谷隆基、小口千明、久保純子、坂上寛之、須貝俊彦、杉戸信彦、鈴木毅彦、鈴木康弘、田中 靖、中林一樹、西村智博、八反地 剛、堀 和明、村山良之、吉田英嗣(幹事)

災害対応担当理事：須貝俊彦

2013年度、本委員会は、5回の委員会と秋季学術大会時、春季学術大会時（予定）に拡大委員会を開催し、以下の活動を行った。

- 1) 災害種別ごとの担当者を見直した。
- 2) 災害対応委員会のホームページを通じて、災害に関する情報を発信している。
- 3) 2013 年 10 月の秋季学術大会（福島大学）では、シンポジウム「東日本大震災の発災・復旧・復興—地理学の取り組みと課題—：福島原子力災害に対する地理学的支援」（参加者 180 名）「東日本大震災の発災・復旧・復興—地理学の取り組みと課題—：東日本大震災の災害地理学的検証—『想定外』を繰り返さないために—」（参加者 130 名）を実施した。
- 4) 2013 年 3 月の春季学術大会（首都大学東京）で実施したシンポジウム「関東平野中央部の環境特性からみた自然災害リスク」の記事を E-journal GEO 8 巻 1 号に掲載した。
- 5) 日本地球惑星科学連合大会（2013 年 5 月）において、日本地理学会が中心となって提案したセッション「人間環境と災害リスク」の、企画・編成・調整・運営への協力を行った。2014 年の同大会についても同様に対応中。
- 6) IGU 京都国際地理学会議の展示ブースにおいて、日本の地理学における災害研究や日本地理学会のこれまでの災害対応を説明する展示を行った。
- 7) 2014 年 3 月の春季学術大会（国土館大学）において、シンポジウム「レジリエントな国土・地域社会の構築に向けた地理学的課題」を実施する。

(4) 地理教育公開講座委員会

委員長：西岡尚也

委員：池下 誠、梅津 譲、小口久智、佐藤崇徳、田部俊充、永田忠道、日原高志、吉田 剛

地理教育公開講座は、広く一般社会に地理学・地理教育への普及・啓発を目的に、地理教育専門委員会傘下の地理教育公開講座委員会が主催して、春・秋大会時に開催している。

2013 年春季学術大会（立正大学熊谷キャンパス）では、第 23 回講座として「地理教育と ESD」をテーマに、泉 貴久（専修大学松戸高校）、梅村松秀（ERIC 国際教育センター）、福島義和（専修大）、池下 誠（練馬区立開進第一中学校）の報告後、シンポジウムを開催、地理教育における ESD の導入について活発な議論が深まった（参加約 80 名）。

秋季学術大会（福島大学）では、第 24 回講座として「3.11 後の地理・防災教育」をテーマに、宮城豊彦（東北学院大）と村山良之（山形大）の「対談：成功・失敗例から学ぶ防災・減災教育」と、高橋 彰（福島県立新地高校）、鶴巻厚保（福島大付属中学校）、宮本静子（名取市立関上中学校）から実践報告があった。この後シンポジウムを開催、防災教育の方向性について熱心な意見交換が行われた（参加約 55 名）。

参加者の拡大をめざし教科書会社 HP への案内掲載や、教育委員会の後援依頼を実施した。その結果、わずかずつであるが学会員以外の参加者が増えている。今後さらに小中高の現場教員の参加数を、どう増やすかが課題である。社会全体へ地理学・地理教育の「すそ野」を拡大するためにも、公開講座を地道に継続する意義は大きいと考える。

(5) GIS 学術士資格委員会

委員長：村山祐司

委員：碓井照子、宇根 寛、小口 高、長谷川 均

本年度は 3 回の委員会を開催した。第 1 回は 2013 年 6 月 22 日（土）に開催し、第 2 回は、2013 年 9 月 21 日（土）10 時～12 時に開催し、GIS 学術士認定、GIS 学術士（見込み）から GIS 学術士への変更認定、GIS 専門学術士認定、GIS 学術士（見込み）認定証発行（2 月 25 日～6 月 21 日）、GIS 学術士実績証明団体認定科目審査、GIS 専門学術士実績証明団体認定科目審査、2014 年度以降の GIS 学術士制度について審議を行った。第 3 回は、2014 年 2 月 22 日（土）10 時～12 時に開催し、GIS 学術士認定、GIS 学術士（見込み）から GIS 学術士への変更認定、GIS 専門学術士認定、GIS 学術士（見込み）認定証発行（9 月 22 日以降）、GIS 学術士実績証明団体認定科目審査、GIS 専門学術士実績証明団体認定科目審査、2014～2015 年度の委員会構成および委員会開催日について審議を行った。

(6) ジオパーク対応委員会

委員長：菊地俊夫

委員：有馬貴之、岩田修二、金田章裕、小泉武栄、河本大地、中井達郎、新名阿津子、松本 淳、目代邦康、柚洞一央、渡辺悌二

ジオパークに関する学術的な議論を深め、各地のジオパークの活動を活性化するよう活動を進めている。委員長を小泉から菊地に変更し、新たに河本大地（神戸夙川学院大）・柚洞一央（室戸ジオパーク推進協議会）が委員となった。委員会を 2 回開催し、以下の取組みを行った。

- 1) 春季学術大会では、公開シンポジウム「大地の遺産を選ぶ」をオーガナイズした。JpGU2014 では、日本地質学会等と

「ジオパーク」セッションを共催した。

- 2) 河本委員がIGU ジオパークコミッションの Executive Committee Member となり、コミッションとの連携を深めた。
- 3) 「大地の遺産百選」選定作業を昨年度から継続して行っている。次年度には「大地の遺産百選」を公表する。
- 4) 過去の関連シンポジウムでの講演者を元に、E-journal GEO でのジオパーク特集号を企画し、その準備をすすめた。
- 5) 2014 年春季学術大会におけるシンポジウム「ジオパークと地理学」と巡検「銚子ジオパークの自然と地域づくり」の準備をすすめた。
- 6) IGU 京都国際地理学会議における市民公開講座「ジオパークから学ぶ日本の自然と文化」において、企画立案に協力し、一部の委員が運営、講演を行った。
- 7) 科学技術振興機構主催のサイエンスアゴラ 2013 で行われた「ジオパークとユネスコエコパーク」の後援を行った。

(7) 地域調査士認定委員会

委員長：中村和郎

委員：石原 潤、田村俊和、田林 明、星埜由尚

4 回の委員会で、主として以下のことを行った。(1) 今年度申請のあった者に対して厳正な資格認定審査を行い、地域調査士 39 名と専門地域調査士 12 名を認定した(学会 HP に公表)。(2) 大学および大学院から申請のあった科目について審査を行った。(3) 地域調査士認定科目の申請に関わるキーワードを点検して一部修正した。

(8) 出版助成委員会

委員長：野間晴雄

委員：佐藤典人、高田将志、土屋 純、橋本雄一、三木理史、横山 智

日本地理学会では 2010 年度から地理学研究の振興と社会への貢献を目的として出版助成制度を開始した。これまでは毎年 3 点程度を選定していたが、予算の関係から今年は 2 点の予定という総務からの意図を受けて選考をすすめた。この助成制度の対象となる図書は地理学に関する学術図書とし、2013 年 6 月 1 日～末日を申請期間として公募し 5 点の地理学書(翻訳書 1 点、共著 1 点、共編著 3 点)の応募があった。その結果、最終的に 2 点を選考した。

出版助成委員会の答申を受け、理事会決定した受賞者名・選考理由を下記に掲載する。

交付認定者：阿部和俊会員

阿部和俊・藤田佳久編著『日本の経済地理学 50 年』(古今書院)

2011 年に刊行した『日本の都市地理学 50 年』はすでに本助成を受けている。さらにこれを推し進めた日本地理学史の「書かれた」オーラルヒストリーとしての意義をもつと同時に、他分野に地理学的成果を発信していくうえでも、十分な効果を期待できると考える。有意義な内容ではあるが、日本学術振興会研究成果公開促進費や他の財団助成の対象にはなりにくい内容であること、40 歳代以下の中堅研究者より下の世代にとって「師」と仰ぐ日本の地理学者たちが、学問に取り組む姿勢と各人が歩んできた研究の道をわかりやすく語りかけて多くの刺激を与えてくれる内容で、今後若い研究者への学問の取っ掛けとなる意義もある。

交付認定者：岡橋秀典会員

岡橋秀典編著『現代インドにおける地方の発展—ウッタラーカンド州の挑戦—』(海青社)

新興経済大国として急速な発展をとげるインドについて、これまで研究が不十分な、低開発地域であるウッタラーカンド州を事例として工業化、観光化、都市化について検討するとともに、そうした変化に伴う社会変動について検討した研究書である。丹念なデータ分析とフィールド調査に基づいた議論であり、インドの地域格差という地理的な問題について扱っており、地理学の著作として価値が高いと考える。州レベルの地方の動きを、総合的、地誌的にとらえようとする試みで、グローバルな問題を考える手掛かりも与えてくれるように思われる。研究者の少ない南アジアを対象とする専門書であるがため、一般書籍として採算のとれる刊行の形を取りにくいという理由も補助申請理由としては説得力を持つ。

(9) 英文叢書編集委員会

委員長：矢ヶ崎典隆

委員：荒井良雄、石川義孝、小口 高、春山成子、松本 淳、村山祐司(幹事)

日本地理学会が 2011 年 6 月にシュプリング・ジャパン(株)との間に取り交わした英文叢書出版覚書に基づいて、本委員会は英文叢書 International Perspectives in Geography: AJG Library の刊行事業を行った。会員からの投稿を受けて原稿を

審査した。また、シュプリンガー・ジャパンの担当者とはさまざまな打ち合わせを行った。記念すべき第1号は2013年IGU京都国際地理学会議の基調講演を収録したK. Okamoto and Y. Ishikawa eds. *Traditional Wisdom and Modern Knowledge for the Earth's Future* で、間もなく刊行の予定である。また、1月にはK. Matsui: *Geography of Religion in Japan: Religious Space, Landscape, and Behavior* が刊行された。2月にはシュプリンガー・ジャパンのプレスリリースに協力した。日本における地理学研究の振興と国際社会への発信を目的とした本叢書は、本学会の重要な出版事業の一つである。本叢書を発展させるために、広報活動を継続することの重要性を確認した。

(10) 小林浩二研究助成審査委員会

委員長：加賀美雅弘

委員：荒又美陽、漆原和子、竹中克行、村山朝子

審査委員会の答申を受け、理事会決定した受賞者名・選考理由を下記に掲載する。

交付認定者：増根正悟会員

「体制転換後のスロヴァキアにおける小規模個人農の農業経営の実態と課題」

交付認定者は助成対象資格を満たしている。独創性に富む研究内容であり、ヨーロッパについての新しい知見が得られるものとして評価できる。調査の準備も進められていることから、この研究助成金によって確実に成果が出されることが期待される。

(11) 選挙管理委員会

委員長：水野 勲

委員：梅田克樹、小原丈明、松本至巨、山下亜紀郎（以上幹事）、池田真志、川久保篤志、今野絵奈、及川裕子

今年度の本委員会は、委員会を5回開催し、次のような手順で2014～2015年度会長候補者・理事予定者・幹事予定者の選出（予備選挙）、会長予定者・代議員の選出（本選挙）、および理事長予定者選挙を実施した。第1回委員会（メール会議）：会長候補者・理事予定者・幹事予定者選挙（予備選挙）、会長予定者・代議員選挙（本選挙）の作業日程、選挙日程の決定（予備選挙：投票用紙発送8月29日（木）、投票締切9月20日（金）、開票・通知等作業9月24日（火）、本選挙：投票用紙・名簿等発送：10月26日（土）、投票締切：11月15日（金）、開票・通知等作業：11月16日（土））、選挙公示（地理学評論第86巻第4号掲載）の作成。第2回委員会（8月29日、日本地理学会事務局で開催）：予備選挙の準備、投票用紙発送作業。第3回委員会（9月24日、日本地理学会事務局で開催）：予備選挙の開票、当選通知の発送、および会長予定者・代議員選挙（本選挙）の準備作業。なお、理事候補者、幹事候補者の就任確認ならびにその後の手続きについては委員長に一任された。また委員長の責任のもとで、12月25日に理事長予定者の選挙の投票用紙発送を行った（1月8日必着、9日、日本地理学会事務局にて開票）。第4回委員会（10月26日、お茶の水女子大学で開催）：本選挙の投票用紙発送作業。第5回委員会（11月16日、お茶の水女子大学で開催）：本選挙の開票、当選者名簿の作成。

今回の選挙の結果、本選挙では有権者数2804人に対して、投票総数は413人、投票率14.7%となり、前回（16.2%）、前々回（15.4%）よりも低調であった。漸減傾向にある投票率について、選挙管理委員会の発足前に対策を検討する必要がある。なお、今回の本選挙の発送・開票作業では総務専門委員会の助力を得た。

8. 研究グループ報告

『地理学評論』第86巻第1号に研究グループの公募を掲載した。2013年2月9日の常任理事会で承認された2013年度の研究グループは31である。それぞれ下記のような活動を行った。

2013年度研究グループ一覧（2013. 2. 9 常任理事会承認）

グループ名	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
近代日本の地域形成 乾燥・半乾燥地域 都市気候環境 土地利用・陸域変化 離島地域	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
環境地理教育 情報地理 流通・消費の地理学 中国地理 産業経済の地理学							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ネイチャー・アンド・ソサエティ 国際経済・経営 エスニック地理学 地図・絵図資料の歴史GIS 観光地域									○	○	○	○	○	○	○	○
農業・農村の地理学 都市地理学 日本における亜高山・高山域の 植生・環境変遷史 持続可能な交通システム 自然保護問題												○	○	○	○	○
少子高齢化と地域問題 ジェンダーと空間/場所 現代南アジア 都市社会地理 ICTを活用した地理学の 社会普及・連携												○	○	○	○	○
GISと社会 東日本大震災による被災地 の再建にかかわる 日本アルプスの大規模地へつ 水と人の地誌 大衆文化の地理学 気候と災害の歴史														○	○	○

(1) 近代日本の地域形成研究グループ

代表者 天野 宏司

2013年度は次の日程で活動を行った。

〔第1回集会（研究集会・ビジネスミーティング）〕2012年3月30日（土）、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者7名。
今年度の活動計画について

「2013年IGU 京都国際地理学会議での研究発表について」

〔第2回集会（研究集会）〕2013年7月28日（日）、於 京都市下京青少年活動センター小会議室、参加者4名。

「2013年IGU 京都国際地理学会議での研究発表について」

〔第3回集会（研究集会）〕2013年8月19日（月）、於 駿河台大学法科大学、参加者9名。

科学研究費補助金基盤研究（B）「近代日本の地方拠点都市の成長と人間主体の社会空間的活動に関する歴史地理学的研究」研究集会

〔第4回集会（研究集会）〕2013年9月29日（日）、於 福島大学、参加者8名。

川崎俊郎（福島工業高専）：「地元メディアによる地誌の歴史地理学的資料の可能性―橘 輝政と郡山毎日新聞に関する報告―」

〔第5回集会（研究集会）〕2014年3月16日（日）、於 駿河台大学法科大学院。

科学研究費補助金基盤研究 (B) 「近代日本の地方拠点都市の成長と人間主体の社会空間的活動に関する歴史地理学的研究」研究集会

(2) 乾燥・半乾燥地域研究グループ

代表者 鹿島 薫

新疆ウイグル自治区およびモンゴル共和国を主要調査対象地域として、活動を展開している。

(中国新疆ウイグル自治区) 2013 年 9 月に高村弘毅会員が新疆大学に招聘され渡航し、講演を行った。そして 2013 年 11 月に新疆大学から 2 名の研究者を九州大学に招聘し、共同でシンポジウムを開催する予定であったが、社会情勢のため延期することになった。これについては、2014 年 5 月新疆大学で開催する予定で、現在準備を進めている。

(モンゴル共和国) 2014 年 2 月 15~16 日、日本・モンゴル・韓国共同のシンポジウム *Geoecological approach on the desertification issue of Mongolia* (モンゴルの砂漠化問題における地生態学的なアプローチ) を九州大学で開催した。参加大学・機関は、九州大学、鳥取大学乾燥地研究センター、モンゴル科学院地理学研究所、韓国・慶熙大学であり、合計 10 名が参加した。

(3) 都市気候環境研究グループ

代表者 榊原 保志

秋季の学術大会で研究グループ例会を開催し、十数名の参加者があった。

発表者とテーマは以下の通りである。

澤田康徳 (東京学芸大) : 「関東地方における降水出現の時間・空間的特徴—都市効果や局地循環との関連—」

渡辺 彩・境田清隆 (東北大) : 「関東地方北部における対流性降水の経年変化にみられる都市気候の影響」

榊原保志 (信州大)・浜田 崇 (長野県環境保全研) : 「那覇市における地表面粗度の分布」

なお、研究グループの継続の可否を話し合い、引き続き継続することを決めた。

(4) 土地利用・陸域変化研究グループ

代表者 木本 浩一

2013 年度は、8 月に開催された IGU 京都国際地理学会議のロシア極東巡検の運営が主たる活動となった。参加人数は多くなかったものの、IGU/LUCC に深く関わるオーストラリア、アメリカの研究者の参加を得ることができた。巡検期間中、今後の LUCC 関連の活動で協力を依頼することができた。また、今回の巡検をバックアップしてもらった、ロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所では、バクラノフ所長ほかの協力を得ることができた。日本地球惑星科学連合 (JpGU) では、本グループに関わる IHDP セッションが開催された。次年度には、Future Earth (FE) が本格化することになっており、これまで築いてきた国際的なネットワークを国内に還元・共有することを本グループの柱としていきたい。

(5) 離島地域研究グループ

代表者 平岡 昭利

2013 年は学会の大会に合わせて 2 回の研究会を開催し、いずれも盛会であった。

[第 1 回研究会] 2013 年 3 月 30 日 (土)、於 立正大学熊谷キャンパス。

崎浜 靖 (沖縄国際大学) : 「近代先島諸島におけるマラリア有病地の地域構造」

堀本雅章 (法政大・沖縄文化研) : 「沖縄県竹富町鳩間島の観光の特色」

宮内久光 (琉球大) : 「日本の地理学における島嶼研究の系譜」

終了後、JR 熊谷駅北口で懇親会を開催した。

[第 2 回研究会] 2013 年 9 月 29 日 (日)、於 福島大学。

花木宏直 (琉球大) : 「近代期南西諸島における地域住民の行動選択と那覇市街地の形成」

元木理寿 (常磐大) : 「沖永良部島における湧水利用とその管理」

堀本雅章 (法政大・沖縄文化研) : 「沖縄県野甫島、水納島、慶留間島、大神島、鳩間島における学校の役割」

懇親会は開催しなかった。

(6) 環境地理教育研究グループ

代表者 朴 恵淑

2013 年度は、次の日程で活動を行った。

1) 研究集会

2013年3月30日(土) 13時～15時、立正大学熊谷キャンパス、参加者8名。

朴 恵淑(三重大):「持続発展教育(ESD)に関するユネスコ世界会議と世界一の環境先進三重大大学の取組」

水木千春(三重大・国際交流センター):「2011年東北地方太平洋沖津波災害に依拠した北海道太平洋沿岸における津波危険度に関する一考察」

金 玟辰(北海道教育大・旭川校):「韓国の中学校地理教科書における環境学習単元の分析」

2) シンポジウムの開催

[三重大大学ユネスコスクール研修会/シンポジウム2013] 2014年2月15日(土) 13時～16時、於 三重大大学環境・情報科学館1階ホール、参加者約80名。

中学・高校・大学の環境教育関係者、学生、行政などの参加があった。

3) 学会発表

2013年6月、谷口智雅・朴 恵淑:「ESD(持続発展教育)と地域環境学」立正地理学会、立正大学。

2013年7月、宮岡邦任・谷口智雅・朴 恵淑:「地図・地図帳を活用した社会科地理教育の実践(巡検)」人文地理学会地理教育部会、三重大大学。

2013年8月、KIM Hyunjin, Geography and Citizenship Education in Japan, The IGU Kyoto Regional Conference, KYOTO INTERNATIONAL CONFERENCE CENTER.

2013年10月、朴 恵淑, Education for Sustainable Development (ESD) of the Most Environmentally Advanced Mie University as the UNESCO Associated Schools (ASPnet) (2013. Oct. 28.), Abstract, of The 20th Tri-University IJSS 2013- The Role of Asia for Innovative Globalization, Mie University

4) 論文

2013年5月、朴 恵淑, Asian Universities Consortium for Education for Sustainable Development (ESD)(2013.May 27.), Hye-Sook PARK, International Conference 2013, ChugAng University, Seoul, Korea, 1 - 33.

(7)情報地理研究グループ

代表者 原 真志・和田 崇

1) 研究会の開催

日本地理学会春季学術大会(立正大学)および秋季学術大会(福島大学)において、以下の通り研究報告会を開催した。

[第12回例会] 2013年3月30日(土) 15時～17時、於 立正大学熊谷キャンパス。

橋本聡士(富士通総研):「地域活性化にICTがどう貢献できるか」

荒井良雄(東京大):「離島のブロードバンド整備と政策的対応」

ビジネスミーティング:IGU 京都国際地理学会議の調整等を行った。

[第13回例会] 2013年9月29日(日) 13時～15時、於 福島大学。

岩鼻通明(山形大):「山形県におけるコンテンツの発信—映画祭における震災特集上映を中心として—」

ビジネスミーティング:IGU 京都国際地理学会議の報告、出版事業の企画を行った。

2) 科学研究費研究の推進

本研究グループの構成メンバー8名により、科学研究費研究「デジタル時代の情報生成・流通・活用に関する地理学的研究(基盤B)」を推進した。

3) IGU 京都国際地理学会議(2013年8月5～9日)への参加・報告

本研究グループの構成メンバーから、荒井良雄(東京大)、箸本健二(早稲田大)、山田晴通(東京経済大)、原 真志(香川大)、和田 崇(県立広島大)、山本健太(九州国際大)、久木元美琴(奈良女子大)、中村 努(東京大)、佐竹泰和(東京大)の9名が報告者として参加した。また、海外研究者の参加を得て懇親会(37名参加)、巡検(27名参加)を企画、実施した。

4) シンポジウム論文の作成

2012年度に実施したシンポジウム「デジタル時代の情報生成・流通・活用」での発表内容を論文にとりまとめた。8本の論文が「地理科学」第68巻3号に掲載された。

5) ホームページの活用

ホームページをリニューアルし、研究グループの活動紹介などに利用している。

<https://sites.google.com/site/ajgsggi/>

6) メーリングリストの運用

メーリングリストをリニューアルし、情報交換などに利用している。

(8)流通・消費の地理学研究グループ

代表者 土屋 純

[出版]

土屋 純・兼子 純編著『小商圈時代の流通システム』古今書院。

これまでの研究グループでの議論、学会での連続発表などの成果を集約し、日本地理学会の出版助成を受け出版。

[第1回研究集会] 2013年3月30日(土)、於 立正大学熊谷キャンパス。

秋元裕介(東京大・院):「消費研究の潮流と消費の地理学—海外文献を中心として—」

箸本健二(早稲田大):「地方都市における大型店撤退とその跡地利用をめぐる諸問題」

ビジネスミーティング

[その他]

メーリングリストによる情報交換を行った。

(9)中国地理研究グループ

代表者 秋山 元秀

2013年度、立正大学熊谷キャンパスでの春季学術大会時に研究グループの集会を開催し、中藤康俊氏に『中国 岐路に立つ経済大国—四半世紀の中国を見て—』(大学教育出版)を出版して」と題して、話題提供および意見交換を行った。中藤氏は、これまで長期にわたり中国各地を訪問され、現地の大学で講義を行うなど、中国地理研究の先頭にたって来られたが、その経験を集約された著作が出版されたのを受けて、現在の中国がどのように変貌してきたか、それを地理学はどのようにとらえてきたのかについて総合的に討論する機会を得ようとしたものである。改革開放の始まりからの地域の大きな変貌、さらに最近の尖閣諸島や大気汚染の問題もあわせて話題提供があり、終了後、活発な意見交換が行われた。

その後、本年度(2013年度)のグループの活動方針として掲げてきた、(1)現代中国地理の研究状況について、情報収集に努め、それをグループのメーリングリスト(chinageo)を通じて積極的に情報提供し、意見交換を進める。(2)本グループのメンバー以外にも、中国での地域研究を実施しているグループがあり、また中国の研究者によるフィールドワークにも注目し、フィールドワークによる地域研究の成果について他分野にも評価されるような発表の方法を実現するために、現在、中国の地域研究を行っている地理学研究者グループの連携をはかり、日本地理学会大会においてシンポジウムを開催することを計画することにした。

なお次期から本グループは、小野寺 淳氏(横浜市立大)を代表者として、研究を継続していくことを予定している。

(10)産業経済の地理学研究グループ

代表者 松橋 公治

産業経済の地理学研究グループは、2013年度の活動を下記のように行った。

[第13回研究集会] 2013年9月29日(日) 15時~17時、於 福島大学、参加者7名。

遠藤貴美子(筑波大・院):「ニット製既製服の国際生産における分業の空間構造—大都市工業集積機能と企業間ネットワークに着目して—」

藤田和史(和歌山大):「家庭用品産業集積・海南産地の製造卸における生産・開発の空間構造」

2013年春季学術大会における研究グループ集会においては、ビジネスミーティングを行った。

当グループが対象とする事象に関する研究内容の深化は社会的要請も高いものであることには引き続き変わりはないと考えられるが、グループ活動が当初の計画に比べて、やや活発でない側面があるため、代表者・幹事役を交代し、人心一新を図った上で継続的活動を行うべく、現状グループ名での継続を申請した。

(11)ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ

代表者 池口 明子

2013年度は、福島大学における日本地理学会秋季大会において、ジェンダーと空間/場所研究グループとの共催でグループ集会「出産の地理学—福島の高齢者をとりまく社会と環境から考える—」を開催した。本集会では震災後に妊産婦の支援を続けている助産師会の会長および助産師の方にご講演いただき、子どもを産み育てる身体や、食べ物、子どもの遊び場など生活のなかの「ネイチャー」の現状や支援について具体的に学び、地理学が貢献しうる研究課題について議論した。また、本年度3月に国土館大学で開催される春季学術大会時にはシンポジウム「生き物を飼育することと地域社会—

ミツバチとヒト、魅惑のかかわりを考える―」を開催する。ここでは近年、蜂群崩壊症候（CCD）による農業への被害などで注目されるミツバチの生態と養蜂を事例として取り上げ、生き物の「飼育」について文化論的に議論することを意図している。コメンテーターとして行政担当者や養蜂実務家の方々を招き、現場の視点から養蜂の現状を広く共有するとともに、その問題を文化的に掘り下げることによって、包括的な問題理解の可能性を探りたい。

(12)国際経済・経営地理学研究グループ

代表者 シュルンツェ・ロルフ・平 篤志

国際経済・経営地理学研究グループは、2013年度、下記のような活動を行った。

[第11回研究集会] 2013年3月30日（土）15時～17時、於 立正大学熊谷キャンパス。

丹羽孝仁（東北大）：「タイの地域労働市場の特質―東北タイと東タイの調査事例から―」

発表後、発表内容に関する活発な議論が行われ、有意義な研究会となった。

ビジネスミーティング

IGU 京都国際地理学会議でのセッションについて

日本地理学会秋季学術大会（9月、福島大学）について

その他

[第12回研究集会] 2013年9月29日（日）13時～15時、於 福島大学。

2人の発表を予定していたが、集会の参加者が発表者を含めて3人と少なかったため、春以降の集会で再度発表の機会を設けることとした。

ビジネスミーティング

日本地理学会春季学術大会（3月、国土館大学）について

その他

[その他]

当グループ関係者は、当研究集会を含め、当研究グループ代表がその代表を務める国際的研究グループ SIEM と連携して、国内外の学会・研究会で積極的に研究発表を行っている。

(13)エスニック地理学研究グループ

代表者 山下 清海

本研究グループの2013年度の主な活動としては、エスニック地理学研究グループのメーリングリストにより、エスニック地理学に関する情報交換を行うとともに、春季学術大会時に以下の通り、研究集会を実施した。

[研究集会] 2013年3月30日（土）、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者12名。

宮内洋平（立教大・アジア地域研）：「プライベート都市の権力―ヨハネスブルグのモビリティと統治性―」

石川義孝（京都大）：「外国人地図帳の意義」

(14)地図・絵図資料の歴史 GIS 研究グループ

代表者 藤田 裕嗣

2013年度の主な活動としては、以下のような研究集会を開催した。

[第9回研究集会] 2013年3月30日（土）、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者30名。

岩崎亘典（農業環境技術研）：「FOSS4Gを用いた迅速測図の広域幾何補正と歴史的農業環境閲覧システムの構築」

David Sprague（農業環境技術研）：「迅速測図から復元する農村の空間構造と土地利用の変遷」

代表者の藤田裕嗣（神戸大）は、ICHG京都会議でも歴史地理学会のジョイントセッションを主催し、発表。発起人のうち塚本章宏（徳島大）が単独発表したほか、小野寺 淳（茨城大）も、連名で発表。

[第10回研究集会] 2013年9月29日（日）、於 福島大学、参加者28名。

古関大樹（京都女子大・非）：「明治初期における地籍図作成事業の展開―特に福島県の場合―」

有賀由紀子（茨城大・院）：「小大名山口家の牛久陣屋の復原」

塚本章宏（徳島大）・藤田裕嗣（神戸大）：「福島県宇多郡の地籍図を用いた復興支援の試み」

(15)観光地域研究グループ

代表者 菊地 俊夫

1) 2013年度研究集会を開催した。なお、2013年度から春季学術大会の研究グループ例会では「観光地理学系学生論文発

表会」を行うこととした。

[第3回研究集会] 2013年3月30日(土)、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者約10名。

有馬貴之(首都大):「2001年以降の研究動向からみた観光地理学への視座」

飯塚 遼・菊地俊夫(首都大):「ベルギー・西フランドレン州ワトウ地区におけるフード・ツーリズム」

[第4回研究集会] 2013年9月29日(日)、於 福島大学、参加者約10名。

開沼 博(福島大):「福島原発に関わる観光地化計画」

2) IGU 京都のプレコンGRESを主催した。

2013年7月31日から8月4日まで、IGU 京都におけるプレコンGRES「Pre-Conference Meeting Tourism between Tradition and Modernity」の主催を担い、各研究者からの発表、巡検をオーガナイズした。

3) 2014年度の研究グループ更新に向けて代表者を変更した。

2014年度・2015年度の更新に際し、代表者を菊地俊夫(首都大)からフンクカロリン(広島大)に変更した。また、発起人についても変更した。

(16)農業・農村の地理学研究グループ

代表者 森本 健弘

1) 例会を2回開催した。

[春季学術大会] 2013年3月30日(土)、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者18名。

①話題提供(所属表記は当時)

市川康夫(筑波大・院):「農業の多面的機能をめぐる議論とフィールド研究への応用—フランス農家調査を通じて—」

②国際地理学連合持続的農村システム研究委員会について

2013年名古屋会議の準備状況が報告された。

2013年における名古屋コロキウム開催、IGU 京都国際地理学会議におけるセッション開催について情報提供があった。

③当グループの活動について意見交換した。

[秋季学術大会] 2013年9月29日(日)、於 福島大学、参加者5名。

当グループの活動について意見交換した。

2) 2013年春季学術大会(於 立正大学熊谷キャンパス)において本研究グループ関係者が巡検「埼玉県北部の農と食とまちづくり」を主催した(3月31日(日))。参加者は28名を数えた。

3) 国際地理学連合持続的農村システム研究委員会と連携して活動し、その情報を日本の関係者に広く伝えた。本グループメンバーの金 科哲氏(岡山大)は同委員会の共同代表として活動した。

4) 上記研究委員会の年次コロキウムおよび巡検を、本グループが共同し、2013年7月29日から8月4日に名古屋大学を中心会場として開催した。参加者は14カ国から40名にのぼった。主な日程は7月29日レセプション、30日研究発表、31日巡検(渥美半島)、8月1日研究発表、2日~4日巡検(白川郷、能登半島、琵琶湖南岸)であった。続いて開催されたIGU 京都国際地理学会議の同委員会セッションへの参加とあわせ、国際的な学術交流を推進した。

(17)都市地理学研究グループ

代表者 阿部 和俊

[シンポジウム] 2013年3月30日(土)、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者約70名。

シンポジウム「変容する都市圏の住宅と居住の近未来像」を共同開催した。

久保倫子(明治大・学振PD):「東京大都市圏における住宅取得行動の変化」

稲垣 稜(奈良大):「大都市圏郊外における通勤流動について—生駒市を例に—」

川口太郎(明治大):「大都市圏における少産少死世代の居住地選択に関する予察的考察」

香川貴志(京都教育大):「郊外ニュータウン周辺の住宅開発と郊外ニュータウン内部の住宅再開発—千里ニュータウンを事例として—」

由井義通(広島大):「郊外住宅地における女性就業と子育て—広島市高陽ニュータウンの事例—」

千葉昭彦(東北学院大):「東日本大震災の被災住宅団地の高齢化問題」

本シンポジウムは主に大都市圏の郊外を対象に住宅開発・住宅取得・居住地選択について行われた。日本の大都市の郊外は高度経済成長期に開発されたものが多い。そして、その多くが現在、さまざまな問題を抱えている。たとえば居住者の高齢化である。一方において、新しく開発された郊外住宅地もあり、そこでは核家族の抱える諸問題がある。こういった

た点において活発な議論が展開された。

[シンポジウム] 2013 年 9 月 29 日 (日)、於 福島大学、参加者約 70 名。

シンポジウム「中心市街地活性化の方向性と課題」を共同開催した。

駒木伸比古 (愛知大): 「地方都市中心市街地商店街における新たなまちづくり活動の展望—愛知県豊橋市を事例として—」

岩間信之 (茨城キリスト教大)・浅川達人 (明治学院大)・田中耕市 (茨城大)・佐々木 緑 (広島修道大)・駒木伸比古 (愛知大): 「地方都市中心部における低栄養高齢者集住地区の特徴とフードデザート問題の実態」

箸本健二 (早稲田大): 「地方都市中心市街地における大型店撤退の影響と利活用に向けての課題」

山下博樹 (鳥取大): 「地方都市におけるまちなか居住の課題と取り組み」

山下宗利 (佐賀大): 「中心市街地の現状と展望—佐賀市中心市街地の低未利用地を通して—」

本シンポジウムでは、現代日本の中心市街地の実態と問題について、主に小売商業活動の実態と活性化、まちなか居住、中心市街地の意味や中心市街地の再生課題の 3 点について、活発な議論が展開された。そもそも中心市街地の再生が必要である根拠は何か、中心市街地の居住者、事業者のために中心市街地の再整備を図ることの正当性とは何か、といった根本的な問題も提起された。

(18)日本における亜高山・高山域の植生・環境変遷史研究グループ

代表者 沖津 進

1) 2013 年度活動

2013 年度の活動は、2012 年度の活動を各自発展させ、研究グループメンバーの個人活動 (野外調査、研究発表、論文執筆など) を中心とした。植生史学会において、公開シンポジウムを企画・運営した (沖津、百原、三宅)。

2) 研究集会

2013 年春季学術大会では日程調整が困難だったので、研究集会は開催できなかった。その後メールで随時協議を行い、研究の現状、招来への発展について意見交換した。

3) 主な野外調査

2013 年 6 月南魚沼市 百原、2013 年 7 月エストニア東部での植生観察 沖津、2013 年 8 月黒部川源流部植生調査 安田など、12 件程度。

4) 主な研究発表

2013 年 7 月。56th Symposium of the International Association for Vegetation Science (IAVS 2013) in Tartu, Estonia

Vegetation geography of mountain vegetation of central Japan viewed from vegetation of maritime-oceanic regions of northeastern Asia Susumu Okitsu など 15 件程度。

5) 主な論文、報告

荻谷愛彦・高岡貞夫・佐藤 剛 2013. 北アルプスの地すべりと山岳の植生. 地学雑誌 122 (4) : 768-790.

安田正次・大丸裕武 2014. 上越国境山地平ヶ岳における湿原の分布要因. 地理学評論 87: 1-16.

など 14 件程度。

(19)持続可能な交通システム研究グループ

代表者 土谷 敏治

1) 2013 年日本地理学会春季学術大会の巡検を企画した。

第 2 班 秩父鉄道の発達と地域との関係、3 月 31 日 (日) 8 時 45 分~17 時。

2) 研究例会を 2 回開催した。

[第 1 回研究例会] 2013 年 6 月 2 日 (日) 13 時~16 時、於 銀座ルノアール神田南口駅前店、参加者 6 名。

[第 2 回研究例会] 2013 年 10 月 6 日 (日) 16 時~18 時、於 銀座ルノアール西日暮里第一店、参加者 7 名。

3) 茨城県ひたちなか市でモビリティマネジメント実施の準備を行った。

ニューズレターの作成・配布

アンケート調査の作成・配布

4) 茨城県ひたちなか市第 2 次地域公共交通連携計画策定の協力・助言を行った。

市民に対するアンケート調査実施方法・調査票作成・配布方法などの協力と助言

5) 研究グループとして、IGU 京都国際地理学会議巡検企画に参加した。8 月 8 日 (木) 8 時 30 分~18 時 00 分

6) 茨城県ひたちなか市で研究グループによる現地調査を実施するとともに、ローカル鉄道サミットに参加した。

8月23日（金）～24日（土）1泊2日、参加者5名

7) ひたちなか市産業交流フェアの公共交通ブースで公共交通利用促進活動を行うとともに、乗合バス・コミュニティバス乗り方教室を共催した。また、来場者に対して、日常の移動行動についてのアンケート調査を実施した。

11月2日（土）、3日（日）10時～15時30分、ひたちなか市総合運動公園、調査参加者・調査協力者10名。

8) ひたちなか市企画部企画調整課と、上記モビリティマネジメント・地域公共交通連携計画についての企画会議を2回開催した。

第1回調査企画会議 2013年8月29日（木）14時～17時、駒澤大学特研地理学－1、参加者4名。

第2回調査企画会議 2014年2月25日（火）14時～16時、駒澤大学特研地理学－1、参加者6名。

(20)自然保護問題研究グループ

代表者 小野 有五

2013年度は以下のような活動を行った。

[春季学術大会] 2013年3月29日（金）、於 立正大学熊谷キャンパス。

①研究グループでのグループ発表

安部真理子（日本自然保護協会）：「日本の海岸整備のあり方について」

辻村千尋（日本自然保護協会）：「自然保護とエネルギー開発—その歴史と展望—」

②研究グループミーティング

秋季大会にむけての活動方針を話し合い、原発と環境問題をテーマにシンポジウムを開催することを決定した。

[秋季学術大会] 2013年9月28日（土）、於 福島大学。

①シンポジウム 「3.11 以後の地理学は何をなすべきか？— たたかう地理学の視点から —」を開催

オーガナイザー：小野有五（北星学園大）、青木賢人（金沢大）、辻村千尋（日本自然保護協会）

オーガナイザーの小野有五よりシンポジウムの趣旨説明を行ったあと、活断層研究と原発立地について渡辺満久（東洋大）から、原発事故による放射性物質の拡散と地域住民の生活について近藤昭彦（千葉大）から、放射線被害を避けるための子どもたちの保養について西崎伸子（福島大）から、原発に代わるエネルギー問題について辻村千尋から話題提供を行った。それを受けて、岩田修二、浅野敏久（広島大）、中井達郎（日本自然保護協会）をパネラーとし、青木賢人を座長として、ほぼ百名の参加者も交え、1時間半にわたって議論した。これらを通じて、原発問題が実は自然保護問題でもあること、原発事故とその後の地域の再生やエネルギー問題における地理学の重要な役割を確認し、これまでの地理学がその責務を十分に果たしてこなかった責任を反省するとともに、今後、社会に対して地理学から積極的に発信する必要性と、これからの学会のありかたや地理学としての方向性について議論することができた。

また、大会後に次年度以降も活動を継続すること、次年度以降は、代表を小野有五から青木賢人に変え、事務局は辻村千尋と目代邦康（自然保護助成基金）が担当することを決定した。

(21)少子高齢化と地域問題研究グループ

代表者 宮澤 仁

日本地理学会大会時に会合を持ち、2件の研究報告および議論を行った。精神障害者グループホーム、保育サービスといった福祉サービス提供における地域の課題に地理学の立場からアプローチした研究の成果報告であった。

[第5回集会] 2013年3月30日（土）13時～15時、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者11名。

三浦尚子（お茶の水女子大・院）：「精神障害者グループホームが抱える事業運営上の問題とその要因」

[第6回集会] 2013年9月29日（日）15時～17時、於 福島大学、参加者7名。

久木元美琴（奈良女子大）：「保育をめぐる近年の動向と地理学における研究課題」

その他、研究グループのWebサイトならびにメーリングリストを用いて情報発信・情報交換を行った。

(22)ジェンダーと空間／場所研究グループ

代表者 吉田 容子

1) 研究グループ集会の開催

[日本地理学会春季学術大会] 2013年3月30日（土）、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者8名。

阿部亮吾（名古屋大）：「フィリピン系移民女性の移住と組織化—日・豪の調査を通じて—」

1980年以降オーストラリアへのフィリピン人移住の増大とともに、シドニー大都市圏西郊の都市ブラックタウンでは、フィリピン人の集住が進んだ。多文化主義国家への移民の定住過程について、ブラックタウンでのフィリピン系移民諸団

体を事例に実施した聞き取り調査から、特に移民女性の移住と組織化に着目して考察した報告があった。その際、報告者がこれまで行ってきた在日フィリピン系移民女性に関する調査結果との比較検討がなされた。

〔日本地理学会秋季学会大会〕2013年9月29日（日）、於 福島大学、参加者 16名。

テーマ「出産の地理学—福島の高齢者をとりまく社会と環境から考える—」

（ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループとの共催による研究グループ集会）

中嶋由佳里（ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ）・西村雄一郎（ジェンダーと空間／場所研究グループ）：
「本研究グループ集会の趣旨」

石田登喜子（福島県助産師会会長）：「福島県の高齢者をめぐる状況と助産師会の活動」

三瓶優理（福島県助産師会）：コメント

吉田容子（ジェンダーと空間／場所研究グループ）：「閉会の言葉—今後の地理学研究に向けて—」

東日本大震災後に福島県内の妊産婦たちがどのような状況に直面したかについて、福島県助産師会のメンバーの活動を中心に紹介するとともに、妊産婦たちを取り巻くさまざまな問題を彼女らが乗り越えるための具体的なサポートについて提言があった。被災地域において「災害弱者」を出さないための地域づくりの必要性が議論された。

2) IGU 京都国際地理学会議の Gender and Geography コミッションのプレ会議を、本研究グループメンバーがローカルオーガナイザーとなって2013年8月1日（木）～4日（日）に奈良女子大学で開催した。8月2日・3日の二日間、6つの一般セッションで計20名から研究発表があった。8月4日の半日フィールドトリップは、大阪市天王寺区および西成区で実施した。4日間の参加者は、日本（中国からの留学生を含む）をはじめ、アメリカ合衆国、インド、オーストラリア、イスラエル、シンガポール、カナダ、スイス、ノルウェーなどから41名あった。

3) 本研究グループのホームページを通じて活動内容を掲載し、情報発信に努めた。

(23)現代南アジア研究グループ

代表者 岡橋 秀典

2013年度は、2回の研究集会を下記の通り春季および秋季の学会大会時に開催した。引き続き、若手研究者の報告を中心に研究交流を進めるとともに、データベースとしての地理写真コレクションなど、人間文化研究機構の「現代インド地域研究」における広島大学拠点の活動を紹介し、地理学からの地域研究への貢献のあり方について議論した。

〔第1回研究集会〕2013年3月30日（土）15時～、於 立正大学熊谷キャンパス。

杉江あい（名古屋大・院）：「バングラデシュ村落社会のイスラーム化—タンガイル県楽師集落の事例を中心に—」

〔第2回研究集会〕2013年9月29日（日）15時00分～16時45分、於 福島大学。

宇根義己（広島大／NIHU）：『藤原健蔵インド地理写真コレクション』構築の取り組み

渡辺和之（立命館大）：「村落の維持機構としての家畜飼養—東ネパール山地の事例から—」

(24)都市社会地理研究グループ

代表者 神谷 浩夫

日本地理学会2010年秋季学会大会（於 名古屋大学）でのシンポジウム「都市地理学の新しい地平」を契機として、2011年度より活動を開始した。シンポジウムの成果は「地理（2011年5月号）」において発表された。日本地理学会2011年秋季学会大会での第1回集会に続き、同2012年春季学会大会時（於 首都大学東京）に第2回集会、2012年秋季学会大会時（於 神戸大学）に第3回集会を行った。本年度は、日本地理学会2013年春季学会大会時（於 立正大学熊谷キャンパス）に第4回集会、2013年秋季学会大会時（於 福島大学）に第5回集会を行い、都市地理学に関する議論を深めた。集会の詳細は以下の通りである。

〔第4回集会〕2013年3月30日（土）15時～17時、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者20名。

小泉 諒（首都大学東京）：「バブル経済期以降の東京大都市圏の社会・空間構造とその変化」

〔第5回集会〕2013年9月29日（日）15時～17時、於 福島大学、参加者10名。

杉山和明（流通経済大）・二村太郎（同志社大）：「英語圏人文地理学における『アルコールと飲酒』に関する研究動向」

(25)ICTを活用した地理学の社会普及・連携に関する研究グループ

代表者 目代 邦康

本研究グループは、メール等を用いて、グループテーマに関する情報交換を行ってきた。その議論に基づき、各自、研究情報の発信につとめてきた。今後は、これまでの議論、活動をまとめた論文を作成する予定である。

(26)GIS と社会研究グループ

代表者 若林 芳樹

GIS と社会研究グループは、2013 年の活動を次のように行った。

[第1回研究集会] 2013 年 3 月 30 日 (土) 9 時 30 分～12 時、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者 60 名。

日本地理学会 2013 年春季学術大会シンポジウム「参加型 GIS の現状と課題」

今井 修 (東京大) : 「日本における参加型 GIS の展開」

山下 潤 (九州大) : 「海外における参加型 GIS の研究・実践動向」

大西宏治 (富山大) : 「地域安全マップ作成と参加型 GIS—富山県高岡市横田小学校区の事例—」

岡本耕平・前田洋介 (名古屋大) : 「防災分野における参加型 GIS の課題」

西村雄一郎 (奈良女子大) : 「カウンターマッピングと参加—東日本大震災後の事例から—」

池口明子 (横浜国立大) : 「『参加型開発』批判と GIS—自然保護区の問題を中心に—」

[第2回研究集会] 2013 年 9 月 29 日 (日) 15 時～17 時、於 福島大学、参加者 7 名。

井上欣哉 (OpenStreetMap Foundation Japan) : 「放射線量のカウンターマッピング」

(27)東日本大震災による被災地の再建にかかわる研究グループ

代表者 豊島 正幸

1) 日本地理学会における公開シンポジウムの開催

①東日本大震災における仮設住宅の生活環境と住民の健康 —パーソナル・スケールでの実証的研究に基づく提言—

2013 年 3 月 30 日 (土)、於 立正大学熊谷キャンパス。8 件の報告を基に、コメント 2 件を含む総合討論を行い、仮設住宅のあり方と政策的な提言について議論した。オーガナイザー: 岩船昌起・豊島正幸。発表者: 豊島正幸 (岩手県立大)、岩船昌起 (志学館大)、増田 聡 (東北大)、葛 浩史 (宮古市社会福祉協議会)、中村美香子 (宮古市和美・西公園仮設団地自治会)、高橋信人 (宮城大)、白井祐浩 (志学館大)、松本宏明 (志学館大)、関根良平 (東北大)、岩動志乃夫 (東北学院大)、岩間信之 (茨城キリスト教大)

②仮設住宅から復興公営住宅へ—地理学と隣接分野からの提言—

2013 年 9 月 29 日 (日)、於 福島大学。地理学分野から 5 件 (居住・生活環境 2 件、商業機能・都市構造 3 件)、隣接分野から 2 件の報告を基に、コメント 2 件を含む総合討論を行い、復興公営住宅のあり方と政策的な提言について議論した。オーガナイザー: 増田 聡・岩船昌起。発表者: 増田 聡 (東北大)、岩船昌起 (鹿児島大)、岩動志乃夫 (東北学院大)、高橋信人 (宮城大)、小泉秀樹 (東京大)、森 直子 (総合研究開発機構)、岩間信之 (茨城キリスト教大)、土屋 純 (宮城学院女子大)、関根良平 (東北大)、小田隆史 (宮城教育大)

2) 東北地理学会における公開シンポジウムの開催および巡検の実施

① 宮古での「東日本大震災」を検証する: 東北地理学会との共催。2013 年 12 月 15 日 (日)、於 宮古市陸中ビル大ホール。オーガナイザー: 岩船昌起。

第一部: 宮古市街地での津波災害を検証する: 3 件の報告、および、総合討論。発表者: 岩船昌起 (鹿児島大)、吉木岳哉 (岩手県立大)、田中耕市 (茨城大)、島津 弘 (立正大)

第二部: 被災者の生活から「まちづくり」を考える: 5 件の報告・コメント、および総合討論。発表者: 岩船昌起 (鹿児島大)、高橋信人 (宮城大)、関根良平 (東北大)、松本宏明・石井佳世・白井祐浩 (志学館大)、岩動志乃夫 (東北学院大)、岩間信之 (茨城キリスト教大)、田中耕市 (茨城大)、浅川達人 (明治学院大)、佐々木 緑 (広島修道大)、駒木伸比古 (愛知大)、増田 聡 (東北大)、江川暁夫 (NIRA 研究調査部)

②巡検「宮古の被災地を歩く—震災 2 年半を経て—」2013 年 12 月 14 日 (土)、於 岩手県宮古市。世話人: 岩船昌起。仮設住宅団地 (宮古市鉾ヶ崎) で被災者との意見交換を行い、また、集団移転事業の造成工事現場 (赤前ほか) を視察し、翌日のシンポジウムに向けて共通理解を深めた。

3) 共同研究等の推進

岩船昌起 (鹿児島大) ほか: 復興公営住宅の住まいづくりとそれを取り巻くまちづくりへの提言—被災者の体力や行動と被災地の再建過程に応じた地域性の反映—。トヨタ財団 2012 年度 東日本大震災対応 研究助成プログラム「特定課題」政策提言助成 (2013 年 7 月まで助成)。

磯田 弦 (東北大) ほか: 津波被災地の商業機能再建モニタリング調査。東北大学災害科学国際研究所特定プロジェクト研究。

関根良平 (東北大) ほか: 原発事故による農業の風評被害と営農再建に関する調査研究。東北大学災害科学国際研究所特定プロジェクト研究。

(28)日本アルプスの大規模地すべり研究グループ

代表者 荻谷 愛彦

1) 研究会の開催

2013年3月30日(土) 春季学術大会(立正大学)において第1回研究集会(立ち上げ集会・研究報告会)を開催した。参加者19名。話題提供:松四勇騎:宇宙線生成核種による大規模地すべり発生年代の決定—方法論とその意義—、西井稜子:山岳域の大規模崩壊地を対象とした土砂生産観測の現状。この他、今後の活動について意見交換を行った。

2) 野外討論会の開催

2013年5月1日(水) 山梨県韮崎市においてドンドコ沢岩層なだれの地形・地質を見学し、成因や年代を議論した。参加者8名。

3) シンポジウムの開催

2013年12月7日(土) 信州大学理学部において、本グループと同大学山岳科学総合研究所が共催するシンポジウム「日本アルプスの大規模地すべり:第四紀地形学・地質学の視点から」を開催した。日本地理学会(共催)には発表要旨集の作成費を補助していただいた。来場者120名。グループ構成メンバーによる発表がなされた(発表者:荻谷愛彦、原山 智、佐藤 剛、齋藤 仁、松四雄騎、西井稜子、高岡貞夫、岩田修二、池田 敦、朝日克彦、佐藤 浩)。

4) 主な成果公表

西井稜子・池田 敦 2013. 二次元電気探査による重力性変形地形浅層部の可視化の試み. 地学雑誌 122.

荻谷愛彦・高岡貞夫・佐藤 剛 2013. 北アルプスの地すべりと山岳の植生. 地学雑誌 122.

佐藤 剛・荻谷愛彦 2014. 「北部飛騨山脈の地すべり地形学図(1:25,000)」の作成とそれを用いた地すべり地形の解説. 地図(印刷中).

5) メーリングリストの活用

メーリングリストを開設し、情報交換、議論、話題提供などに活用している。

(29)水と人の地誌研究グループ

代表者 宮岡 邦任

1) 研究集会の開催(開催日時、開催場所)

[第1回研究集会] 2013年3月30日(土)、15時分~17時、於 立正大学熊谷キャンパス。

[第2回研究集会] 2013年4月20日(土)、14時~16時、於 お茶の水女子大学。

[第3回研究集会] 2013年5月25日(土)、14時~18時、於 日本大学文理学部。

[第4回研究集会] 2013年6月16日(日)、12時~15時、於 お茶の水女子大学。

[第5回研究集会] 2013年6月27日(木)、19時~21時、於 日本大学文理学部。

[第6回研究集会] 2013年7月20日(土)、16時~19時、於 日本大学文理学部。

[第7回研究集会] 2013年8月18日(日)、15時~18時、於 日本大学文理学部。

[第8回研究集会] 2013年9月20日(金)、14時~18時、於 日本大学文理学部。

[第9回研究集会] 2013年9月29日(日)、13時~15時、於 福島大学。

[第10回研究集会] 2013年10月25日(金)、17時~18時30分、於 お茶の水女子大学。

[第11回研究集会] 2013年11月23日(土)、14時~17時、於 日本大学文理学部。

[第12回研究集会] 2013年12月27日(金)、14時~17時、於 日本大学文理学部。

2) 学会発表

長谷川直子(お茶の水女子大)・宮岡邦任(三重大)・元木理寿(常磐大)・大八木英夫(日本大)・谷口智雅(三重大)・戸田真夏(青山学院大・非)・山下琢巳(城西大)・横山俊一(立正大・非):「地誌学的視点の一般への普及—旅行ガイドブックを使った試み—」日本地理学会秋季学術大会(福島大学)。

3) 論文

谷口智雅(三重大)・長谷川直子(お茶の水女子大)・大八木英夫(日本大)・宮岡邦任(三重大) 2013. 陸水に関わる『大地の遺産』の選定. 陸の水(日本陸水学会東海支部会論文集) 60: 61-63.

長谷川直子(お茶の水女子大)・大八木英夫(日本大)・谷口智雅(三重大) 2013. 地誌および地理学の意義の再考と「大地の遺産」のアウトプットに関する提案. お茶の水地理 52: 21-24.

4) 巡検

2014年1月11日(土)、10時~17時、「東京山の手における水景」(西新宿—表参道—渋谷—目黒—恵比寿)

5) その他

MLによる意見および情報交換

(30) 大衆文化の地理学研究グループ

代表者 大城 直樹

今年度活動開始。春季学術大会時は代表者のシンポジウム主催のため、秋季学術大会に立ち上げ集会をもった。その後、基本知識・情報の共有・共通理解を図るべく、大衆文化の現場の訪問・観察・議論を行う研究集会を4回行っている。報告者および報告内容は次の通り。

[第1回研究集会] 2013年9月29日(日) 15時~17時、於 福島大学、参加者7名。

大城直樹(明治大):「研究グループ発足にあたって一個人的経験の一般化に向けて」

山口 晋(目白大):「信州上田における野外フェスの終焉と地域コミュニティ」

[第2回研究集会] 2013年11月15日(金)、於 明治大学、参加者7名。

荒又美陽(恵泉女子大):「明治大学米沢嘉博記念図書館(まんがとサブカルチャー)の見学」

[第3回研究集会] 2013年12月15日(日) 15時~19時、於 目白大学、参加者15名。

テーマ:映画『ブレードランナー』について語らう

大城直樹(明治大):『ブレードランナー』に観る未来都市像」

[第4回研究集会] 2014年2月1日(土) 13時~18時、於 明治大学および墨東地域、参加者8名。

及川裕子(お茶の水女子大・院):「墨東エリアにおけるアート活動について」

その後、墨東地域巡検

[第5回研究集会] 2014年3月15日(土) 13時~17時、於 明治大学。

金沢文緒(学振・研):「現実と虚構のはざま—18世紀ヨーロッパにおける景観画の展開—」

(31) 気候と災害の歴史研究グループ

代表者 三上 岳彦

2013年度は、春季学術大会と秋季学術大会で例会を開催するとともに、メンバーの研究交流の場として活用するためのメーリングリストを開設した。

[第1回例会] 2013年3月30日(土) 13時~15時、於 立正大学熊谷キャンパス、参加者10名。

三上岳彦(帝京大):「新研究グループの設立趣旨説明」

平野淳平(防災科研):「古日記天候記録にもとづく長期気候変動の復元に向けた課題」

財城真寿美(成蹊大)・三上岳彦(帝京大):「歴史気候データベースの構築と Web-Site 公開—JCDP(Japan-Asia Climate Data Program) —」

[第2回例会] 2013年9月29日(日) 13時~15時、於 福島大学、参加者9名。

田上善夫(富山大):「気候史料から復元した日本とその周辺における7~12世紀の気候変動」

平野淳平(防災科研):「日本における20世紀前半以降の夏季気温の長期変動」

[メーリングリスト開設]

2013年7月29日(月)、「気候と災害の歴史」メーリングリストを立ち上げた。開設時の会員は14名であるが、随時会員を増やす予定である。メーリングリスト開設の目的は、全国各地の研究・教育機関等に所属する会員相互の情報交流と学会等の会告に活用し、研究グループのアクティビティを高めることである。

9. 他学会との交流等

- (1)2013 年日本地球惑星科学連合大会
2013 年 5 月 19 日（日）～24 日（金）に幕張メッセにおいて開催された。
- (2)中部ライフガード TEC2013——防災・減災・危機管理展（協賛）
2013 年 5 月 24 日（金）～25 日（土）にポートメッセなごやにおいて開催された。
- (3)2013 年京都国際地理学会議開催記念「地図展 2013 日本の世界文化遺産」（後援）
2013 年 7 月 27 日（土）～8 月 5 日（月）に京都駅地下街 Porta 内 ポルタプラザほかにおいて開催された。
- (4)富士学会 2013 年度春季学術大会（後援）
2013 年 6 月 1 日（土）～2 日（日）に富士宮市民文化会館において開催された。
- (5)第 8 回日中韓地理学会議（共催）
2013 年 7 月 31 日（水）～8 月 4 日（日）に九州大学箱崎キャンパスにおいて開催された。
- (6)全国中学校地理教育研究会第 54 回全国研究大会（後援）
2013 年 8 月 2 日（金）～3 日（土）に東京都江戸川区東部区民館において開催された。
- (7)第 52 回地図ならびに地理作品展（後援）
2013 年 9 月 7 日（土）～21 日（土）に広島市こども文化科学館において開催された。
- (8)富士学会 2013 年秋季学術大会（後援）
2013 年 10 月 26 日（土）に山梨県立大学において開催された。
- (9)2013 年度「初等中等教育における GIS を活用した授業に係る優良事例表彰」（後援）
2013 年 10 月 26 日（土）～27 日（日）に慶應義塾大学三田キャンパスにおいて初等中等教育現場において、GIS を実践的に活用した授業に取り組んでいる教員に対し、表彰が行われた。
- (10)旭川市「第 23 回私たちの身のまわりの環境地図作品展」（後援）
2013 年 10 月 26 日（土）・27 日（日）に旭川市科学館において開催された。
- (11)山陰海岸ジオパーク国際学術会議「城崎会議」（後援）
2013 年 10 月 26 日（土）・27 日（日）城崎温泉西村屋ホテル招月庭において開催された。
- (12)岐阜県「第 19 回児童生徒地図作品展」（後援）
2013 年 10 月 26 日（土）～11 月 24 日（日）に岐阜県図書館において開催された。
- (13)GPS/GNSS シンポジウム 2013（協賛）
2013 年 10 月 29 日（水）～11 月 2 日（土）に東京海洋大学越中島キャンパス越中島会館において開催された。
- (14)鳥取県「第 15 回児童生徒地域地図発表作品展」（後援）
2013 年 11 月 16 日（土）～12 月 8 日（日）に鳥取市歴史博物館（やまびこ館）、倉吉未来中心、米子市児童文化センターにおいて巡回展示が開催された。
- (15)GIS day in 東京 2013（後援）
2013 年 11 月 23 日（土）に首都大学東京・南大沢キャンパスにおいて開催された。
- (16)多摩市「第 17 回身のまわりの環境地図作品展」（後援）
2013 年 11 月 29 日（金）～12 月 1 日（日）にパルテノン多摩において開催された。
- (17) 日本学術会議公開シンポジウム「増大する災害と地球環境問題に地球人間圏科学はどう取り組むのか？」（共催）
2013 年 12 月 5 日（木）に日本学術会議講堂において開催された。
- (18)GIS day in 関西 2013（共催）
2013 年 12 月 7 日（土）に奈良大学において開催された。
- (19)日本アルプスの大規模地すべり研究グループ・信州大学山岳科学総合研究所シンポジウム「日本アルプスの大規模地すべり——第四紀地形学・地質学の視点から」（共催）
2013 年 12 月 7 日（土） 信州大学理学部において開催された。
- (20)第 17 回全国児童生徒地図優秀作品展（後援）
2014 年 1 月 11 日（土）～2 月 23 日（日）に地図と測量の科学館、国土交通省 1 階展示コーナー、NHK ふれあいホールギャラリーにおいて開催された。
- (21)日本学術会議公開シンポジウム「地域の再生と国のかたち——東日本大震災の教訓を活かす」（後援）
2014 年 1 月 12 日（日）に日本学術会議講堂において開催された。
- (22)学部教育における地理学参照基準について（後援）
2014 年 1 月 12 日（日）に日本学術会議講堂において開催された。
- (23)第 18 回「震災対策技術展」横浜（後援）
2014 年 2 月 6 日（木）～7 日（金）に横浜国際平和会議場において開催された。
- (24)ハーバード大学カール・スタイニッツ教授のジオデザイン・シンポジウム（後援）
2014 年 2 月 7 日（金）に東京大学駒場リサーチキャンパスにおいて開催された。

2014年度研究グループ一覧

2014. 2. 8 常任理事会承認

	グ ル ー プ 名	代 表 者
継 続	・近代日本の地域形成研究グループ ・乾燥・半乾燥地域研究グループ ・都市気候環境研究グループ ・土地利用・陸域変化研究グループ ・離島地域研究グループ ・環境地理教育研究グループ ・情報地理研究グループ ・流通・消費の地理学研究グループ ・中国地理研究グループ ・産業経済の地理学研究グループ ・ネイチャー・アンド・ソサエティ研究グループ ・国際経済・経営地理学研究グループ ・エスニック地理学研究グループ ・地図・絵図資料の歴史GIS研究グループ ・観光地域研究グループ ・農業・農村の地理学研究グループ ・都市地理学研究グループ ・日本における亜高山・高山域の植生・環境変遷史研究グループ ・持続可能な交通システム研究グループ ・自然保護問題研究グループ ・少子高齢化と地域問題研究グループ ・ジェンダーと空間/場所研究グループ ・現代南アジア研究グループ ・都市社会地理研究グループ ・ICTを活用した地理学の社会普及・連携に関する研究グループ ・GISと社会研究グループ ・東日本大震災による被災地の再建にかかわる研究グループ ・日本アルプスの大規模地すべり研究グループ ・水と人の地誌研究グループ ・大衆文化の地理学研究グループ ・気候と災害の歴史研究グループ	天野 宏司 鹿島 薫 榊原 保志 木本 浩一 平岡 昭利 朴 恵淑 原 真志 和田 崇 土屋 純 小野寺 淳 末吉 健治 池口 明子 シュルンツェ・ロルフ 平 篤志 大石 太郎 藤田 裕嗣 カロリン・フンク 森本 健弘 阿部 和俊 沖津 進 土谷 敏治 青木 賢人 宮澤 仁 吉田 容子 岡橋 秀典 神谷 浩夫 目代 邦康 若林 芳樹 豊島 正幸 荻谷 愛彦 宮岡 邦任 大城 直樹 三上 岳彦 埴淵 知哉 佐藤 正志
新 設	・健康地理研究グループ ・「新しい公共」の地理学研究グループ	